

株式会社 森川紙器製作所

デザイン紙で芯材を覆う 貼り箱を一貫製造

企画力
自信有
コスト
相談
試作可
小ロット



展示会に出展して箱製造技術の応用をアピール

業務内容
設計から組み立てまで
箱を一貫生産

菓子や電子部品、ねじなどさまざまな製品を入れるための紙箱を広く手がける。設備を取り揃えて設計・企画から裁断、印刷、組み立てまで一貫生産対応しているため、同業他社から一部工程の依頼も受けている。中小のパッケージメーカーでは分業が中心の中、同社は手作業ラインと機械による自動ラインの併用で小ロットから量産まで自社生産できる体制を整えており、貼り箱は約7日、トムソン箱は約14日と短納期を実現している。

強み
トムソン箱だけでなく
貼り箱製造で存在感

1枚紙を折って組み立てるトムソン箱に加え、デザイン性のある覆い紙を芯材に貼り合わせる「貼り箱」が製造できるのが特徴だ。2タイプの箱によって提案力を高め、顧客の要望にこたえている。トムソン箱は保管時にかさばらないメリットがあるが、貼り箱はより丈夫で貼り合わせる紙によって高級感を出せる。変形箱など製造が難しい製品にもチャレンジし、貼り箱の普及に取り組んでいる。

応用力
箱の製造技術を生かして
一般にもアピール

貼り箱の技術を生かし、飾りやパークラフトなどの企画も進める。サッカーボールのパークラフトや、貼り箱の技術を応用した壁掛け時計のインテリアパネルなどを製作。「貼り箱」という言葉の認知度がまだ

低いとみて、松本剛社長は「板紙メーカーなどと連携し、さまざまな企画を打ち出して市場を広げたい」と考えている。箱という基本形は崩さずに応用方法を模索していく方針だ。

今後の展望
貼り箱の生産能力を
強化し、需要拡大へ

今後の貼り箱の需要拡大に備え、さらに量産できる体制を整える。3600万円を投資し、全自動貼り箱機を平成27年5〜6月をめどに導入して貼り箱事業の拡大を図る。従来、貼り箱は小ロット品が中心で、手作業を中心としていた。貼り箱の自動ラインはスライドガラスメーカー向けの専用ラインとし、他ユーザー向けは手動ラインで製造と使い分ける形だった。今後は産業分野でも強度の必要性から貼り箱使用が進み、従来の菓子などでも高級感を演出するためにニーズが増加するとみている。自動ラインを増設することで大ロット製造でき、1〜5種の形式バリエーションに対応する。従来の小ロット品もより効率化。自動機の製品の切り替えが短時間でしやすくなっていることから導入を決めた。生産スピードが大幅に上がり、製造能力は日産1500個から10倍の1万5000個となる。顧客のニーズに応じた大きさやデザイン



貼り箱の自動製造の様子

COMPANY PROFILE

株式会社森川紙器製作所

大阪
26

当社の 歴史

昭和15年8月に大阪市北区岩井町で森川紙器製作所として創業。設立当初は車などがまだ普及しておらず、リヤカーを利用し配達をしていました。昭和20年3月に応召のため一時閉業し、昭和23年5月大阪市北区黒崎町にて再開しました。戦後も紙の供給に困ったと聞きます。昭和28年11月に株式会社森川紙器製作所に組織変更しました。

高級感と強度を持つ貼り箱を自社で一貫生産できるのが当社の強み。自動ラインも増設し、産業分野を含めた需要の増加に対応していきます。

代表取締役 松本 剛さん



■主な事業内容
紙製容器製造業

■主な取引先（納入先）
食品メーカー、
食品卸問屋、
螺子製造メーカー

住 所／〒581-0039
八尾市太田新町
2-88
T E L／072-948-2190
F A X／072-949-2519
創 業／昭和15年8月
設 立／昭和28年11月
資本金／2,050万円
従業員／25名

<http://e-hako-morikawa.co.jp>